

広報4月号のこのコーナーで、ショッピングセンターニコアの駐車場内にある、ストーンサークルのお話をしました。覚えていらっしゃるでしょうか。

ストーンサークルが出土した荒谷遺跡は、馬淵川沿いにある縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての大きな集落遺跡です。複雑な変遷が見られ、最終的な状況は、直径100mを超える円形の配石遺構を囲むように家並みが並んでいました。

配石遺構の中には、さらに径10m前後の円形の配石遺構3基と、これらに対応すると思われる3棟の高床式建物跡と供え物をするための特

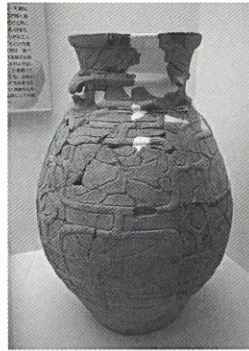
土器の棺（ひつぎ）



別な土器が出土しました。このことから、配石は墓石で高床式建物は死者を送り出すための施設と考えられ、村は巨大な墓域とそれを取り巻く居住域に区画されていたことがわかりました。

実は、荒谷遺跡のストーンサークルのすぐ下からは、甕棺が出土しています。

甕棺とは、死者を埋葬する際に甕や壺を棺桶としたものです。この荒谷遺跡で出土した甕棺には蓋が無く、中から発見されたのは洗骨された成人の骨でした。ストーンサークルの下から現れた甕棺、中に眠っていた人は一体どんな人だったのでしょうか。



遺体の埋葬に使われた土器の棺が甕棺です

二戸市埋蔵文化財センターミニ企画展「縄文から弥生へ」

～岩手県を舞台として～

期間 10月29日(金)～11月28日(日)

場所 市埋蔵文化財センター展示室

料金 一般50円、小中学生20円

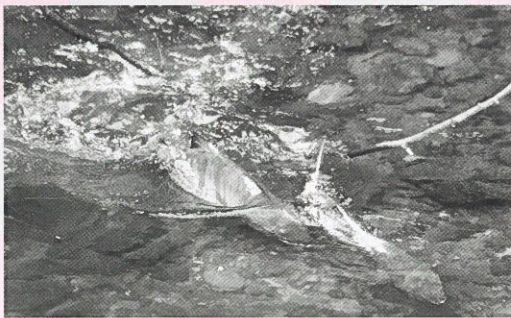
問い合わせ先 市埋蔵文化財センター (☎23-8020)

こみゅにTeaたいむ

41秋目

金田一川でサケのそ上を確認

10月上旬にサケの遡上が金田一川の下流で確認されました(写真)。約10匹のサケを確認しましたが、体も白くなり海からここまでの旅は、壮絶なものであると感じました。サケは、3～5年間海で過ごし、生まれた川に産卵のため帰ってきます。サケは自分が生まれた川のおいを覚えていて、おいで自分が生まれた川を判断しているそうです。



地元の人からお話を聞いたところ、その金田一川下流のサケは、5年ぐらい前からそ上を確認しているとのこと、それ以前はサケのそ上を見たことがないそうです。

現在、馬淵川にサケが遡上した要因として考えられるのは、馬淵川の魚道改修工事が、平成16年度に本市と青森県三戸町との間で行なわれたことです。サケの遡上の確認後に市内を調査した結果、一昨年には安比川でもサケは確認されているとのことでした。

地元の人も見ることが無いというサケの遡上を伝えようと、10月19日に金田一児童館の児童を対象にサケの観察会を開催しました。

この日参加した児童は9人。しかし、肝心のサケの姿が見えません。もう、いなくなったのかとがっかりしていた所、水中でじっと動かない1匹のサケを発見。その後も2匹のサケが泳いできて合計3匹のサケを確認することができました。

工藤紀鵬くん(5歳)は「大きいサケがのぼって帰っていった。また見たいので泳いで来てほしい」と興奮した様子で川をみつめていました。



「あっ、あそこにいるよ！」サケを見つけて大興奮の子どもたち

この欄の問い合わせは、市地域づくり推進課(内線652)まで